

ハンガリー農業における構造変化 ：収穫逡増と経路依存性に関する一試論

鬼木 俊次

旧社会主義諸国の農業生産は、1990年頃の市場経済への移行とともに大幅に落ち込み、改革から10年経った今でも回復は極めて遅い。その問題の一つに農業構造の二極化の問題がある。旧来の資本集約的大規模農場と数多くの零細な家族農場が存在し、いずれも生産性は低い。本報告は、改革後のハンガリー農業における構造変化を、社会主義時代に形成された農業生産の収穫逡増性とそれによって生じる経路依存性によって説明することを試みた。市場経済改革後、政府の農業支持の低下や輸出市場および国内市場の縮小のために、農場レベルの交易条件は悪化した。当初は私有化により効率的な農業構造が生まれるとの期待もあったが、大幅な交易条件の低下に関わらず旧来の資本集約的な大規模農場が存続している。一方、ほとんどの家族農場は極めて小規模であり、効率的な経営が成立しにくい状況である。改革前のハンガリーでは「二重システム」と呼ばれる大規模農場と小規模農場との相互補完的な連携体制があったが、大規模農場のあり方が変化するとともに連携は崩壊した。西欧農業において中核的な経営体である中規模な農業企業の創設はなかなか進行していない。

ハンガリー農業における規模の経済は、技術開発における自己強化的プロセスを通じて発展した。一度大規模生産のシステムが確立すると、それに関わる様々な制度がその大規模生産に適合するように形成され、それが新たな大規模技術を生み出す。大規模農場に付随する小規模家族農場も大規模農場の補助のもとで技術的な知識を蓄積してきた。このため、農業構造が二極化した状態で技術や制度が形成されてきた。現在のハンガリー

の農業構造は、改革前のこの状況に「ロック・イン」されていて、慣性効果のため最適条件への調整が妨げられている。

もし生産技術が規模に対して収穫逡増を示すすれば、スムーズな移行は行われない。この状況で交易条件が悪化すれば、複数の均衡解の間を不連続的に変化することが起こる。生産規模の初期水準のわずかな違いがあっても異なる均衡へ収束し、その動学は複雑系の様相を示す。ハンガリー農業の旧来の構造は、交易条件が大幅に変化した後でも残存しており、慣性効果があることを示す。資本集約的技術に基づく大規模生産は、良好な交易条件の下でのみ高い収益を維持しうるので、改革後早い時期に規模が縮小するものと思われていた。このような経営形態の経路依存性は、一部の領域で収穫逡増があるS字型生産関数によって生じると考えられる。計量経済的検定により、ハンガリー農業においてこのような生産関数が存在するという仮説は支持された。比較的規模の小さい農業企業の生産は収穫逡増を示し、大規模な農場組織は収穫逡減を示す。

この研究の分析は、農業改革は生産技術や関連制度改革を行いながら漸進的に行うべきで、そうしたことを無視した急激な改革では新たな担い手を育成することができないことを示唆する。ハンガリー農業をリードすることが期待される中規模農場を支えるためには、政府はファイナンスシステムや中間財部門、マーケティングや配送業などのアグリビジネスや農業関連サービス部門ならびに技術開発・普及システムを確立するような政策をとる必要がある。また、アグリビジネス・サービス部門に対する外国直接投資を促進することは、技術や制度に関するノウハウを国内に移転し、これらの部門のセットアップコストに対する資金不足問題を解決する上で有効な方策であろう。